

アメリカ合衆国の出移民

なぜアメリカ南部の白人はブラジルへ移住したのか。従来の研究では、プッシュ・プル理論を通じて、彼らの移住の送り出し要因（プッシュ要因）と受け入れ要因（プル要因）を明らかにしている。プッシュ要因としては、南北戦争（1861年～1865年）における南部連合の敗北、黒人奴隷制の廃止、白人至上主義社会の崩壊などが挙げられる。一方、プル要因にはブラジル社会の「白人化」政策や黒人奴隷制の存続、綿花生産技術の導入などがあり、その主な研究としては Dawsey (2005) や Oliveira (1995) などがある。

実際、アメリカ合衆国の移民研究においては、「シカゴ学派」（シカゴ大学社会学部）をはじめとする入移民 (immigration) に関する実証的な研究が多いが、出移民 (emigration) に関するものは少ない。この点、出移民に関する研究を進めた Dawsey らの学術的功績は大きいとされている。

しかし、19世紀の合衆国には南部白人以外の出移民の事例も存在しており、これには奴隷制時代の黒人奴隷が関与している。管見の限り、最も有名な事例はアフリカ西海岸のリベリア (Liberia) への入植ではないだろうか。南北戦争以前、合衆国では自由黒人の国外移住運動がアメリカ植民協会 (American Colonization Society) によって推進され、1820年から1864年の間に約11,000人の黒人がリベリアに移住した。そして、彼らは1847年にアフリカ最初の独立国家であるリベリア共和国を建国した。その他、逃亡奴隷を助けた秘密結社「地下鉄道」(Underground Railroad) を通じて、数万人の黒人が自由を求めてカナダに渡り、1849年にはオンタリオ州のバクストン居住地を建設した。

このように、白人と黒人のアメリカ人は、それぞれ新天地を求めて自国をあとにしたが、強調すべき点は、両者の移住のきっかけには奴隷制が大いに関係していたということである。黒人は、奴隷制が廃止されているか、もしくは存在しない地に移住した一方、白人は、単一栽培と奴隷制を基盤とする大土地所有制が維持されている地に移住したのである。

新大陸における黒人奴隷制

そこで、黒人奴隷制についても触れておきたい。新大陸における黒人奴隷制の歴史は、大航海時代にまで遡ることができる。奴隷制は、大西洋奴隷貿易（ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ大陸を結ぶ三角貿易）の重要な一角を担っており、その構図は次のようになっていた。ヨーロッパ（ポルトガル、スペイン、フランス、オランダ、イギリスなど）からは武器や工業製品がアフリカに輸出され、アフリカからは黒人奴隷がアメリカ大陸（主にアメリカ南部、ブラジル、カリブ）に輸出された。そして、アメリカ大陸からは砂糖、金、コーヒー豆、綿花などがヨーロッパに輸出された。実際に、ブラジルは1535年から1888年にかけて500万人以上の奴隷を輸入し、アメリカ大陸で最も多くの奴隷を輸入した国であった。

また、従属的な社会構造の中で採用され続けてきた黒人奴隷制は、長い征服と植民地化の歴史の産物であった。ここでは、

筆舌に尽くしがたい奴隷制の残虐さについて詳述しないが、社会学者のオリバー・コックスは奴隷制の歴史に着目し、ギリシャ、ローマ、アメリカ南部、カリブ、ブラジルの奴隷制の特徴に注目している。彼は、今日に至るまでくり返し問題となっている「人種差別」の元凶は、新大陸の黒人奴隷制にあると主張している。なぜなら、ギリシャやローマでは主に戦争捕虜が奴隷となり、その人種や民族、階級は多様であったが、アメリカ南部やカリブ、ブラジルでは主に黒人が奴隷労働に使役され、黒人種をターゲットにした人種主義的な性質を持っていたからである。

南北戦争と黒人奴隷の解放

このような歴史的・社会的コンテクストのなかで、南部人移民は黒人奴隷制を擁護し、白人至上主義的な思想を信奉していた。それでは、なぜ彼らはブラジルに移住する必要があったのであろうか。その理由は、南北戦争における南軍の敗北にある。

南北戦争はアメリカ史上最大の戦争で、黒人奴隷制を否定した北部と、それを肯定した南部との内戦であった。1861年4月12日、南軍によるサムター要塞砲撃によって開戦し、その後4年間の激戦を経て、1865年4月9日のアポマトックス・コートハウスの戦いで北軍が勝利を収め、南軍最高司令官のロバート・リーが降伏して終戦を迎えた。その結果、南部は北部の支配下に置かれ、1877年まで続く社会的・政治的な再建時代 (Reconstruction Era) が始まった。この期間、南部は劇的な変化を経験した。

まず最も顕著な変化は、黒人奴隷の解放であった。リンカーン政権が発布した1863年1月1日の奴隷解放宣言により、約400万人の奴隷が解放された。その後、ジョンソン政権下で「合衆国憲法第14修正」が1868年7月9日に成立し、アフリカ系アメリカ人に市民権が与えられた。そして、グラント政権下では「合衆国憲法第15修正」が1870年2月3日に成立し、彼らに選挙権が付与された。これにより、アフリカ系アメリカ人の基本的人権が認められることとなった。この変化を契機に、アフリカ系アメリカ人の一部は南部の政治に参加できるようになり、再建期には16人が連邦議員に選出され、1人が州知事、6人が副知事に選ばれた。一方で、南軍に従軍した白人は選挙権を失い、白人を中心とした南部社会は衰退の一途を辿った。そのため、南部社会の終焉を予感した一部の南部人は、奴隷制が存続していたブラジルへ移住することを選んだのである。この移住の過程については、次号で詳しく見ていきたい。

[参考文献]

- James M. Dawsey. *Americans – Imigrantes do Velho Sul no Brasil*. Piracicaba: Unimep, 2005.
- Ana Maria Costa de Oliveira. *O Destino (não) Manifesto: Os Imigrantes Norte- Americanos no Brasil*. São Paulo: União Cultural Brasil Estados Unidos, 1995.
- Oliver C. Cox, *Capitalism as a System*. New York: Monthly Review Press, 1964.